五
15
1386
6

門 イ 5
號 1386
卷 6

昭和十九年
三月三日受
小田封吉氏
長男友太
郎氏寄贈

もるかつよ五の考

柏野ちくれみ

秋さて。若ハみるぐしかきそて。さびしれゆべう。さ尾ひ
のうぐわ。ひもくのろうて。むしくゆてゆれ。ゆく
んうす。よゆる。

かきぬべきかきぬ尾見れぞうれ。うぐしてそえ
えかきぬうぐわ。かく俗ちぐろぐきをさへう。うを生るハみ
む人。をふ。ゆべうゆれど。よやさぎれそなん。

熊澤氏が神典を論ずる

熊澤氏が二海抽流くいふ抽りいひきるハ。神書ハむくの傳

へをそのまゝかゝで、さるゞく後の学ふ寓言して出るもの、その学者
か道徳の学れうしに成ふ寓言のたやうまぐれ成ゝせて寓
言をそうし、荘周などのやうに理を明らかしゝバよかるべ
し、神聖はたゞ世元人のうへまでかわる成寓言しゝれど
大ようまでハ世ゞがゝ〳〵いつて宣者をたぎつゝえ
むまゞ神の伝典をいまゞ寓言と見るハめづらしくもなう
ぬ伝のまゞしやうし、さべく傍ハ学中にあやし成事をれ
きまゝるとぞ、かゝまゝふ思ひとるかゝ神代の事どもを
みな寓言ぞゝんなるを、儒ものをふもたゞ〳〵ゝんの
ぞうゝぬ近き学の神学者ゝいふものゝ言ハ、ゞ

ゝとゝ〳〵ものやしたるものをバ、まゝゝゝおゝとゝつゞゝゝべく
伝ゞねゝ、ゝゝかハかゝゝこきやゝ明まで、中ゝまかゝらふ
て、人乃智ハ、ゞ者て及ぬゝゝろ多きゝとえさゝゝで、
ゝ後づ乃理をおのがさゝるとりしおゝ〳〵知つゝゝべきあ
ゝ思ゝるかゝゝゞ後のゝがゝとしゝべて学中のおゝゝろハかぎりれ
きのまゝて、ゝゝふ人のみゞ成智りしゝりほゝをゞき
ゝゞふたゝゞバ、神代のゝたやゝゝて、元人のいゝゞりハ
ゝぬやゝゝゝるといゝゝん、筆者道徳の学れうしなゝ、寓
言はゝゞるいでおろゝしゝハ、其事ゞものゝれふのいゝりふき
ゝゝゝゝもれゝ、ゝぬゞいかゝ儒ゝふやゝゝ成いふなるべしゝハ

まつ弓ひきうとはくそ〳〵かりうゝ古き集はの
ゆもそこひなき淵やとさゝぐ〳〵まぐまて流き
てハうつてうそべうハ伊の流きあそうもえぬるゆゑて
その猟係ぎゆえてゆしうるすへうは山川の後敷の後乃さま
ぐゆしゆまそふさゝしぬゝらぬゆえていけもそこひなき
淵のさまゞぬきとうもまでをいまさゝ〳〵係くおりもざるも
いふぞやむゝ神代のはふそ流ゆるきゝ人ゆもひいもゆ
ふそ流の学問をおくそも寓言をも作るゞうはぎえたうん
まハはゝ〳〵ゆえもかゝるゞ山川乃後のまちる岩敷の学き
をも形ぐうハつうゆ形をこ流えぎゝむえぞうもなき

淵ゆえハやむべきうゝ乃ゝぎるをゆ

乃やゝ流るゆの説

り人といふゆの学ハおき学ふて神代うゝ伝る物乃化
と記ゝて其の人といひゝ和乃乃ゝゝやゝまゞ上つる
ゆ首（カシラ）といふ形者て其のたゝふ耳といふゆのみて乃ゝくゆ
声をよくきゝおりて其上つ方に目といふ和二つありてよゝ
づの物乃食うゝ流のうゝ乃ゝくゝえたきゝえその下
ゆ鼻といふりのもきて物のう流うぎ又下ゆ口といふ物あり
ておくよゝ夢其物ゝ流ゝゝぞをうごゝ舌流ゝゝ
うゝやゝゆえその夢ゝ和ゞゝふうて和ゝなりて弟乃

事況いひうを又首より下はたゞうゝまといふりの者て示か
岐ありて指といふ此およびをたゝかして第はうぞ況はし
第の物を造り出きり又下つゝふ足といふ和こゝも二つゝて
うどかゝきゝべだる言はゝ山をものゞつゝ出てゆゞこまぞも
ゆりきゆきつゝて又胸の肉り隠りて心といふ和のみつる
こハりるゞ中ふもいとりやしに和りて色も形もかきゝめ
かゝ上の件耳の赤り況きゝ目の物をゝ口乃りのいひ多足乃
きゝゝくも皆仏のきゝるゞふてぞみるゝきふ此人といひ
し物あるゝいゝなやこてやゝゝふこをりてゆゝゝゞ
ふゞひうかのよなゞ乃きゝるゞ皆やこて いきゝうゞく

ゝもきゞるとてやみふきゝ記しゝゝむ書況ゞゞしやの止
ゝゝゝゝ伊の伝ゞゞして神代きゝんりふいゞこの
きゝりやしにるゝこのあるべききゞゝゝ猩も和くゝりきゝ和き
寓云ふてハりるゝゝぞいきゝむう
まゝ
又上はきゞゞりゝ人といひて神代ふきゝ和の茅わきゞめと記
して仏人といひる物の出来しやゝふゞきゞ兄菜のふう
男女きみゝるゝその男女乗稱きゝしほゞふきゝゝはきゞ況
しゝゝふ女のきゝきゝんやゝゝふぬくらゝふかりて十月
といふてありひゝきゝいゝゝおゞておゝふまへより伊ゝあ

らん。鉾きて啼(ナク)のぞ出来ふる。うとうがてえられぬ。えくの
ねうすがんをうる。まくさぐめ。そくけふくうふがうつるかどよ
ア。て。胸乳(むなち)より白きけの出そえて。しかぞ出ぬ。をうけ出
来て啼(ナク)ねの。彦けいづる孔(アナ)。うてくうばうちようげふ
のむまくふよる。ゆるといそびのませつ。月日をゆるまくふ。生和
やうくふ大きふなるとゆきて。そぐめのほどハせぐりしうざぐ
ち。やうくふきいぞくなむ。上の伴(ミクリ)ふいつるやうふハがとわうる。
とうくふんを。儒者えてバ。又行とういそむくまる。偽の寓
言とぞいつべき。もべく神代の事ぐり。今ハ学ふまるすのな
うるばうぞ。うやくとハ思ふるとぞうまくうバあやくとハ

おりはまくや。今学ふうるまくふ。今行とばうぞあやくとハ思ひ。
ちうくふ思ひえぐくきば。学ふ行くゆるうる。好ふ物うはあや
くかくぐる。いひりてゆきバ行やくかくぬまなきぞうよ。

漢籍(カラブミ)と神代(ヨブミ)典(フミ)とのきぐめ

上の三伴(ミクリ)ふつきて。又をうれさくく説(ゴト)ぞ思ひえる。そは
もべくかくく書(フミ)ぬ。ようびふかくうおくうるハ。ゆるう
くべくハ。神代の伝説(ツタヘゴト)ぞうれくあうふきこゆる。
ぢうぞ。一つちうれ事ふたきて。ちくきむくくうる。むくく人
ぐ。今此人といふあを一人。伝をいぢんくきむういふか
くさうハ。ゆくうるを好る人。乃ふふをうぐきく。

例の陰陽和合ありて、男女なりもしそこなかく活(イキ)たるまでは人をば、
たゝうゝ俗てこれをいとゞ泥上ふいてやうふしぐかのきゝと女の
国の内乃みそうるぎふよりわてハ心をもいまだ小力は一つぐふつ
うつぐ。何の労も形くて成(ナリ)出るぞかし。さるハその神全はうちの
ちゝうぎよ。形ふのかしこう理(リ)ふうげあるてうあ
ふ。そのいわさるかハほふいぐてもまものぶだくとうこびいるも
ゑとゝうゝ考くしく。考(ヒラハ)べのるいぶもあもおうりてえうれ
くあうう形るちゝぎなるもどもちゝふよわてゝそ人のゝとをふ
てハえ俗ゝぬゝてゝの人乃さぐうゝるやゝ成(ナリ)出るかを神乃

陰ちゝうぎハよふをかわぐゝいやしくゝ人ある和あゝうぎや。
かゝぬゝその説(トキゴト)をいとかしくゝハやゆゝとぐも人乃さゝうハうぐわ
しいうもバ及ぎなゝ陰ゝうぎてかの人のゝるくを泥りて人をたく
らんゝきれぐもひひり俗わうゝていくハざゝるぐめくかゝると。
神代のつゝぐどハうよ国の内の懲(ヒガ)のゝるめハえうかくあうう形を
ぐもよゝ人を造ゝとかをふ内ぐきをや此ゆゝりをうひゝ
ゝて神芸事ぐもよ形うハべゝ形ふのおゝをうわいうゝぐを
かくゝえうかくあうふきゝゆゝぐもゝてふを人の智(サトリ)乃及
びぐくゝをかわがゝ俗きゝゝうよ形えうれうゝるぐゝて
をゝさゝう称うくゝうぐ。

平右政大臣はら元

平治元年十二月平右政大臣はまづ下らんとて然るに信
でゝれりふ京ふ乱のおこりをふるとてそこらかゝる後
をりわ和泉守大島高うりまゝで神をゆるしてまれき
ふうゝかひこぞよかりてゆびうきわをごくをゝるてよ
大ゝるもの神ふ平治ねがゝるふゝてゝると此人の言ハそづし

かゝざえ

愚管抄ふ内大臣伊周人ゝやまとゝ侍ゝ多ゝ
ゝる人をわかゝざえをよゝて詩をゝいみしゝ侍ゝとを
ゝとゝたりかゝざえといゝるゝそづし漢学をいゝるし

べゝざえとハ和歌書ねどふも学問のゝるゝをゝいゝる

ゝゝふゝいふ吉ふを早字ゝび出べきゝ

三代実録十三の巻ふゝる宣命ふ早ハ罪那不賜ゝゝる此
早字ふみふゝ訓べし此詞ふよゝゝゝる事ふ
よゝるハゝゝゝゝ

中ゝ後中でハ諸王おゝうわゝ事

園大暦康永三年乃除目ふ従五位下為実王天暦御後
貞和二年の除目ふ従五位下宗友王天暦御後同三年
の除目ふ従五位下資方王寛和御後延文四年ゝ除目
ふ従五位下資能王寛和御後ゝゝとこのほゝまでハ諸

王色なりあかりしとぞいふ。

車乃紋のる

同じ書ふ車は文(モン)のるすぐ行ぬまでい今の号のおくるくるくは定紋といふものなるらしやふかのよりわ能と。車は文のるくるくは大畧定名て法言ほやうふかの也。

老子のうる

六百五十五合ふ老子隆伝新作ふるもんも同じむりふて人のつるふ老をもるか邦。後成て判云ぶふること

ときるも可為歟。

さるかふの字

台記別記藤原多子名字勘文ふ抑後宮以従(テ)草合字(ヲ)為(ル)名(ト)之人贈后茂子茨子寺於(テ)皇胤吉例也といふ。サ草合とかくもるを。

かんでは小路

勘解由小路を大路ふかんでのるるぢといふ。

古今伝伝授

後京良天皇享禄元年十一月十六日こきんの伝伝じる。

逍遥院中さるるいふ古陽歟記りる。

いりでるいふ云

俗云ふ仁とぞしてぞるぞ。

サトビゴー

西行ぶ又ふ。いう

でくいふそつもし。ゆふ大江匡衡。為(メニル)老大臣。供養(スル)浄
妙寺願文ふ。我若向後至(リ)大位(ニ)心事相諧(ハ)者。爭(イカデ)於(テ)茲
山脚造一堂云々といふ。漢文ふかえづゝし。
太上皇はふ法皇
太政門内大臣毎歌合ふ。嚴嶋法幸道記ふ。幸
加ゝを給ひて後乃歌ふいとゝかくれやせ(瘦)もゝなる
ぞ。ゆゝしてそゝゝぐと。やれきゝぢなどぞ
きゝえしといふ。帝の法皇法名づゝし。
物を清むふ塩水
貞観儀式平野祭條ふ。皇太子。於(テ)神院東門外下馬。

神祇官中臣。迎供(ヘテシ)神麻灌(ヲキ)塩水(ヲ)訖(テ)就休息舍(ニ)先是(ヨリ)進
一人。率(テ)執(ル)幣(ヲ)舍人(ヲ)至(テ)神院東門(ニ)曳(キ)神麻灌(ヲキ)塩水(ヲ)共(ニ)至(テ)
祭場。授(ニ)神祇官(ニ)といふと。今は学ふも。物を清むふ塩水を
そゝゝハ。ゝきてをれり。
そちろん
阿佛尼の。うゝ称ふいちゝ。はゝ人を人のまゝふぎいで
あふ。又そちろんをぐを。ゝ。ゝ。人をう
らむふもいゝぐ。又そちろんとやをもせぐと。といふと。今
の学ふハ。此口論(クチロン)をゝぐ。ふそゝろんといふし。
菩薩樂

江家次第興福寺供養儀ニ菩薩樂ハ菩薩十六人擎供花云々なぞ云ふ當麻の練り供養と
いふものゝぞハこれなるべし

かしらうゝといふもの

栄ヒ物ぐわ庸この別の名ニかしらぐかうゝおちゝ海
そば一天乃名ふてそおりまんをとゝいふと今ハ云の云
ふかみうゝと祝ふきこゝ云ふ日ど

むさしといふぐ

わらハ考べのたゝぐふ むさしといふ物あり五雜組といふうゝ
ふ委巷ノ兒戲ニ有馬城不論縦横三子聯則為城城成

則飛食人一子其它或夾或挑就近則食之不能飛
食也といふよゝ物ゝ日本紀ニ城をきゝと訓る中
ゝ行ゝ韓語し紀ニバむさゝといふ名ハ馬城

三郎

現報霊異記ニ文忌寸氏ハ人ハ字曰上田三郎といふこと
ゝ行ゝ聖武天皇の代ニ名ハ高ハ三郎ハ名
ふ名ゝゝふてそ字といふハ今の世の俗名ハ

ほゝかをと ゑき

物を棄ル俗ニ ほゝ
ふかゝしかゝ行ゝ又日物ニ弁ハ名ハ ゑきふて系

ものとなるべきハ今いふむいきし。

高はなさくさくら花

ちきの時のまと又高はなの道といふて。後の学りハ学問とて。古今集序に花をふかのはなやかなるをたとへ。

ふ御強(コハ)と云西又菜(サイ)をまゐらせつゝ同じ書ふ御迴(ンニハリ)八種とつゝ枝ぎしるハ百ちせとそ云

たゝ名ゝ女神の社ふまゐる

大神宮雜事記ふ弘仁四年九月十六日豊受宮ゟ大内人神主真房が妻かの子詣て玉垣の下にして蘆(コウミ)ゟ乃る織ふよりて勅使ゟ枝ぎして真房夫婦ふ大祓をおゝせゝりしるすゝてゝ云ゝ女居乃内ふ糸(ヒ)入るゝ禁ぜゝ除ゝ花(リ)ばゝよりゝ前(サキ)ふ腰(ハラ)妊(メ)ふぞゝも神の社ゝまゐるて忌(イミ)ぞゝしてゝ

大神宮ふ法人乃まゐる

同書ふ兼平四年九月御祭云ゝ参宮人千萬不(ニ)論貴賤(ヲ)云ゝとつゝ法(ハ)ばゝそのゝろもかゝゝ野ゝそとゝ大神宮ふゝ私幣をなるゝハ禁制なるゝかゝる詣(ッ)ふるゝ

ゝ野べゝゝかゝゝぶりしふや

狂歌

狂歌ゝいふゝ文粹の一の巻源順の歌の小序ふゝ

但ゝかゝゝのゝ今いふ狂歌ゝハかゝゝぞ

今ゝ世田舎(サナカ)ふて村の長(ヲサ)を云ゝいふ文粹二の巻野ゝ延喜二年三月十三日の官符の文ふ新(ニ)立(テ)在(ニ)郡(ニ)多(ラク)施(スル)奇法(ヲ)

と巧り類聚三代格にも出でたるこれその領主より在家
といふを立郡て其の事沙執せしし
機のかぐりといふ拙
今の号機かぐりといふ拙あるハ和名抄機の條に機
巧之處和加豆利と巧るかづりを訛る名し和名抄
今本ハ利字を和ハ誤り古き本に利と巧る
江戸の地名こゝにかゝる
宗祇法師が回國雑記といふ拙いとく次の日淺茅沢を
ちて彩洲といふ所ハおのむき佐らとて是ぞ名所
を尋ひるゆ水ハ恐の器といふ所ハ拙て松原ハ
ハやとみて彩のちゆふ巧ふりの物をばものびの器
のわるかひあしこびるとて おいし川といふ所ハ
うるとてうるとうるとうると

[illegible]人乃[illegible]思ひ出[illegible]略[illegible]ぞとふ。
[illegible]ふ。此[illegible]ぎ[illegible]ふ所[illegible]ぬ[illegible]ぞ。
[illegible]ちいつ[illegible]

ちゝやう

学ぶ。おやとなるものゝ[illegible]ぐる者[illegible]畜生[illegible]ふ。
[illegible]ても。隋の文帝が時ふ。陳夫人[illegible]
ふ。太子廣がきさ[illegible]文帝笑て。いよ〳〵怒つて。畜生
何足付大事といろ[illegible]

ふうん

今学ぶ。寐る所を布團といふ。ふ〳〵布單とい

ひ〳〵地あり。布毯(フタン)とも書くり。此地より牧(ウツ)出る名なるべし。

えぞ三郎

保元盛衰記ふ。成通康頼俊寛の鬼界が嶋ゝ流[illegible]て
[illegible]ふ。[illegible]の海ふ鸞岳(ランガク)といふ山有て。その山ゝ。
夷三郎(エビス)殿とやゝ神をいひまつりて。岩殿と名づくといふ
なり。神祇官年中行事ふ。戎三郎(エビス)殿とゝなる。此神のて。
いとゝふ〳〵。神ふ殿とやゝ[illegible]。えびしき移し。
いせ地方の中ゝ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ちん。此[illegible]

かくまと後つひはその人をひきて妻とするもいつくむといふ
ちなしにのぼりて海のうりていつるのをかをかを河ふちづたて此白はをはそれえ
しるし人なきぞかし

いせ物語ふみ本はの事

伊勢物語ふみ本といふ本ありて業平出ざるかをかをしひ
て書字して書る物し六條宮御撰とそ定ぎられバ
その親王のれたるどうとそ定りてゆけどいつぬ偽りて後の物し
まげもべての家はあてざまふうたるかくして志ぎをかく正一
かうどんはぬてのうそ多かるそが中小間うを苦労指之血を

及後おどやうふうをうハしぬちぶ出て業ふるもさるもぐ
ふあると又東洲熟写をうくかるを逆利おぐちるし信濃てそ
ぐへと行ゆうを信ぎをと なんといふ辞小何字を用ひぞ小社
少ふ諸字を用ひうしゆぐひいとんはだ志ちのをなくび忍をを
恩恵流給へを給江又うくへうとへおどのへをもみを江とうに身
をもとことをやおどのをもとをやといふ辞を面親とも忘を者
摺く書体なぐうちうち俗字ハ今のをうても字むおどのの
おどハををくく俗るてかきをぐふかく誤ちるハむげ小和くや
うをとうにもとへちぬえせりのくちるざとうてて志字ハちべて
うるとがうにのりのくを行をつ何をよのつの俗字本とうべ

て考ふるふるびふよりあるべきそこに有て、かゝる本のたぐひ
ふ、此本は、よりたゞしく、かゝるべき、そは、思へど、こゝもむかしの一つ
の本なりしを、後人、かゝふるふるを、をぢ、をぢ、されば、今
も、一本ふるそなりふべきかのこゝ、ふいとゝ、ゝ、ゝ、ねねてはゞ、縣
居大人乃、此物語を解、たるふるよりつよの假字本をば、今本と
いひて、そこにふるふるしゝて、此古本をゝと、古本といひ
て、こゝらゝ、ほめて、おとぐゝ、ゝ、ゝ、ゝて用ひ、そとされば、
つゝふるき、ナ、字を、他の、カレ、徒て、さへ、引きまるはいりなるふるゝ、
さぐかり、古の假字はるりを、つのふいとゝ、ふゝ、悩ぐけ本は、まぐ
ゝと、假字はいとゝ、みぐもて、ふ、ふるとなきるぐをゝいふゝ

也、ゝ、ゝ、ゝ

を和歌(カヘシ)・俳を多義(メギ)・十一日(トヲヂリヒトヒ)・十麻理比止日(トヲマリヒトヒ)とあらはしたる今
の学ばせる者の古語よりはるかにてよろしくハ所もあれども
世ものがたり出来てのちの文のさまふうにして時代(トキヨ)のふるきを忘
ひんらくさるものさしに十一日ばかり世俗のをそるるとなりてハ
一日にてをそべるとぬるひなどをそれかくるとをとうるをもと
ひとをそべるとをとあるをもあるハ古学者のふるぎ
又をとうめるをいるぎるハさをぶいうへのいひざるばもくざるかわ
又ふりがなのぐるふよのつひもかりハ俗もあるひとわと
ふるは世本にも俗行者仁亀有と仁てふ辞ををへるかども古
の雅言(ミヤビゴト)の例をもてゐ今の言ばを俗言(サトビゴト)ばかりらしかるもの

をもりくまぐ他るかていよくいつるをハ俗をるびをるをや

まをを

いせ物語乃言字本の假字ばいをみるとがるをきハ倡ををを他家
ふるはるじかるばひくいふるを他ばををてかるる俗ばきをを他
をくくをえむををてあをををふみるりををををびをつをんをいふ
人をはるををるまるきるもはるびをれるををはるををるをハ
いよくおくかるるりのしをのゆるををををべる假字づるひふむ
て所をむををるハををでふみるをををの後の言ばるるかるるを
をるをををしてかるるまるをををふせんをををでふ所ををるるが
るへるるるをばるいよくを後の言ばををばをり

志のぶもぢずりといひしは、古き糸の布にて、たゞの布
歟。昭乃注に、陸奥国の信夫郡にかぢずりとて、髪をみだ
れやすくふるまひしるべし。志のぶもぢずりといふは、贊仲が勢法膳
断に、信夫郡よりむしろ摺て出しとある。摺しといふるが
ごとし。物語師のいせ物語に、垣衣草の形を紫なる色に
て摺しるべしといふと見えたり。陸奥国にて石二つあり。そこにて
きりてするといふ。偽をしむしはきり衣を、ぬぎかへて
きるとしれて、已ぐ来て出てきりてきるし。徒を出し、さて垣衣草
の形乃丸をしるべしとて、おのが意のみづからにしるべしといふ

志のぶもぢずりは、いせ物語に、古き糸の布にて、たゞの布
歟。昭乃注に、陸奥国の信夫郡にかぢずりとて、髪をみだ
れやすくふるまひしるべし。志のぶもぢずりといふは、贊仲が勢法膳
断に、信夫郡よりむしろ摺て出しとある。摺しといふるが
ごとし。物語師のいせ物語に、垣衣草の形を紫なる色にて
摺しるべしといふと見えたり。陸奥国にて石二つあり。そこにて
きりてするといふ。偽をしむしはきり衣を、ぬぎかへて
きるとしれて、已ぐ来て出てきりてきるし。徒を出し、さて垣衣草
の形乃丸をしるべしとて、おのが意のみづからにしるべしといふ
とあるは、何のよしぞやかの歌に信夫郡といふがいとばたてにて
きるに、国の名をとり出て、よしなき垣衣草の枕詞にはおくべ

きぬうは又みぐるゝようをいとむよきのぶ茅ハいとも細つりゝかゝ
らぐでかの茅はきゝみそさつふぐかりみぐるゝゝ抽りハ竹ゝびそ
きも搨ゝる形を紀きてゝも竹ゝびゝるべゝぐでゝるゝるふつきてみぐゝ
ゝゝんをいづきの抽乃ゝゝふてゝも用ゝゝてゝるべゝ竹ゝゝ抽より
あゝふ紀きゝる形ゝるゝぐでハかゝをゝゝび又垢衣をゝゝりゝて搨染ゝぐ
ふきゝべき抽ゝゝきゝかゝゝゝげゝるをゝゝきて又ゝゝ伝来ゝ紀ゝゝり出ゝゝゝふ
ゝゝ紀破ゝゝて布紀ゝぐ染ゝゝを伝出ゝゝり貢流ゝゝハ古ゝゝぐゝゝい
ゝれゝゝきゝゝゝが丁ゝ延喜の大蔵内蔵紀の式ゝゝ諸國所貢
染布の色ゝゝゝぐゝゝて搨ゝゝる紀ゝゝ衣をおのゝ搨ゝゝ抽てゝを
搨ゝゝきゝゝいゝる紀ゝゝきゝゝて搨ゝゝて竹ゝゝゝきゝゝゝな

ゝゝ紀ゝゝん紀ゝゝゝゝ出ゝゝ名ゝゝる物を色で用ゝゝてハ今を
苔も同ゝゝを染ゝて伝来ゝ紀ゝ石紀ゝゝふゝてゝゝれゝゝをゝゝふハ
いゝゝをゝゝ紀ゝゝゝゝ

の尻を蓙ざるか引るゐをわてまへりをもゐかいふくいつるぞ
さきとしくゆしまるけをどそのまの手書くいつる五日六日の騎射を
師の考へけどくく大内のる場ふてそけるとそ日左右近場のる物
ゐてあるあくハいづをけ書ゐもそてざをバ右近る場のその日とハ
いづをけ日をいふけるをさぐけくいぐさて又師の考へるハゐを
ヲ沈引柵まくハ標柵をくくんくいれつをどる物の埒をゐ
をわくいるてくゐりをそてざ又ゐりふぐくとおりそれざまし
て標をゐくいるてをとなくう又標を立をバくて日沈標柵の
日とハいふべくもけくざをバ此説も二つをとふ取ぐくかふくふ
此るハまくふ雖義りぐ者る係

尾張人天野信景がけるくハせる埴瓦くいふ物をハいせ和俗
のをふじをけるる沈をぐをふいるをふ絵ゐづけくるなり
ををふいるくゐ人をふじるる沈秘をてるれ海浜ふ遊ぐる
埴竈沈をくふ海氏埴とやくふ磨をふ砂を聚めて堆をゐ
く畦をなをて潮水ありて砂畦をゐるて形りよるるくハ潮
を汲て乾をゐ日くふかくくて後り砂を積をゐの粘を作
るて日ふくる沈をるふじをいるり実ふ富士の形り
ゐくり之の客京ふ居て海をけるふるる時をて をる人な
くゐをるくをるをわけいるやるハをくくるふやくおぐし

なまじ。高不二と云ふ。抱ハこまとし。おのもも。埴やゝ深を成ゝ
又しふ砂をはみあぎて。塚のごとしゝる抱いくつとも成くゝて。
はてふ富士山をゝるふぐき形しゝる抱し。師の古ことゝりハ。
高名本ふなりハを。鳴者と出るをうりて。かの山乃鳴海の鳴高
うて。高不二と成。雖彼の川原のてしゝいきれるハいとゝ伝
らきぬ説し。川原形ゝバやゞて川ゞりてそつふべきいそゞう志
不ゞりとハいをむ。さきバ川原を結い居る俗も形ゝ。おゝ居るとも
ゝゞるてしそのゝ川原をさしゝをおゞろゝしゝ鳴る抱りハ
ゝうゞ原をや。又ゝえ山を抱だかり立ねあげゝんゝゞ
しての不ゞを高名本ハ。體と出る説用ひゝ。形のゝゝと。

そゞふゝえ山ゝてい〳〵ゝバ。先ハ鳴海の高し。やゝふいきれ
ゝゝゞ。ひえの山をゝゝといゝてゝゝゞ高さはゝふてゝ抱ゝ。
こゝゝ成形ゝゝて八ゝゞ細ゝてゝ抱りゝ形ゝべきバ。そのゝゝと
いゝゝ遠〳〵ゝ。抱ゝバ高字本ハ體字ハゝゞゝ形ゝゝや。又都のゝ
えは山をいゝて刺ゝハ雖彼の川ゞゝゝ。共ゝ大き形抱りて。
ゝゝしき文ゝゝといそれゝゝゝ。ゝゝり形ゝきひゞゝし形ゞ
ゝゝ似ゝゝんゝハ大き形ゝ小きゝハかゝゝゞ。伝抱ゝまれゝゝん
ふゝてふはゝ形きてゝゝゝゝ。ゝゝと鳴ゝかのふもゝゝゝゞ。
川原ゝりゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝて。ゝゝ形ゝハ方べゝゝ。抱ゞゝのゝゝゝは
ゝゝハ。京人のゝゝべき形ゝゝ孫ゞ抱乃ゝゝ〳〵かゝゝゞゝゝゝ

ぞ。ものいひべりなどぞ。海をはるかにかすみわたりて。京人のむざうなる。はじきふかくぶ。はるかにつのかくしたる。たゝずまひ。なつかしうをかしきこと。

東宮は伊勢斎宮の女御

古今集に二條后は。東宮のみやにまうし給ひしとき。伊勢の方はうせ給ひ。むかし東宮の女御の方はうせ給ひ。また二條后は。

和天皇の中宮し。貞観八年に。女御となり給ひ。貞明親王生(ウミ)給ひ。同十一年に。親王皇太子にたち給ひ。陽成天皇にゆづりまゐらせ給ひ。元慶元年に。中宮となり給ひ。ゆゑ。のちに。女御まで。なり給ひ。母にをくり。東宮は女御とも。東宮の伊勢母女御。伊母は伊勢といふなり。

伊勢所と中比称(ナ)す。女御ふまも更衣にまれ。皇子皇女を生(ウミ)給ひ。人を中比称し。を。

物語に。相撲。更衣。などと。光孝氏。を。生(ウミ)給ひ。後は伊勢所といふなり。

誤りて。伊勢を。東宮乃妃(ミヤ)の。ものとなるかゝ。此古今集いせ物語。なども。

伊勢所。といふ。あるはいみじきことし。東宮の妃を。伊勢とも。

宮は女御とも。東宮の。伊勢所とも。中せるなり。紫式部が。餘材妙筆。

物語聽断。なぐさいつゝ。

絶るを師も付俗称りまどそれるとて東宮乃位息所と
き皇太子妃嬪妃を中宮と人々思つるハ支流なりやといそれること加りてもむごてし東宮乃
御母を中宮とてハ此の古き集ものたる支流なりやと又東宮
の女御と中宮とも其の母女御といつて形以て位息所も絶る
ものとなるべし又源氏物語ハ一のみを以女御東宮以外
つるもみなその位母なるこれ俗語なるべしとてこれを
特くして俗語のまゝふ半ばしといひ古今集へ題して
さきの中宮きてくしといつて俗語を考へをつぎ〳〵也
ハいふべやこをかつて〳〵みづ〳〵かの後の云の俗称ふまどそ

とあめし左ふ東宮の妃を位息所〳〵中せる俗あるやつるを
ハ〳〵その俗と思つるハ六條の位息所なる説こと又うれまどし
のんなしふびし〳〵その名を加の六條位息所〳〵中宮を前坊の妃なる
よしふて中宮ハあるべ前坊の妃ふを生給ひてその位母なる
なるし位息所とハなるし天皇の女御更衣なるべの位ふ生給ふを絶
中宮〳〵日ごとなる形をやまた伊勢物語乃東宮の女位を高名
ハ〳〵こをも東宮の位息所とつるふよるとし東宮の女御〳〵ふて
を此書ハてつるとしふべきてをあげしな俗語し〳〵ひきそれ
るもひべてし〳〵そ〳〵集の何出中〳〵物語ふを形ぐハ位とて
を國史などのふべひとハ異ふ〳〵てかやうに称呼をどもふべ

當時(ソノカミ)宮(ヨノナカ)ゐるうへいひあるべかるまじかりしかばものさたなどとりてこぶそべきこそぶかりけれ後宮のはさぐ光仁天皇
后の次は妃次は夫人次は嬪なれば女御といつかは日本紀の雄略御
光仁天皇の御時は後は皆ばかりしかば仁明文徳のはさはかりよ
としてはは妃夫人あるべきはさはさはさ

ぎ。まゝ本に。穂（ホ）はとくるもんゆゑ。かはいそぎ。かはいそぎてゝいへ
かはいらしでおぐハ。まつうぬこちを。結（ゆ）りの。ぐるぐるや。うつ
の山乃そゝろ。ヨゲいゝ。ヨゲいゝ。ゆきふ。ぢさうへ
でもまぶりてゝ。かへでのきハ。てふをそし。上乃そゝのきゝ
ゝ。ゝやうふ。一つの格（サト）し。秋ときぬ。ゆ。ゆ。ゆ。
きゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆ

ハ、妹ゞゑざるまふし、妹をそゞるまふいハゝしび、上ふかのが名ぐちの
ゑとゝゝるゝて、そゝゝ妹ゞゑざるまふるゝ紀べゝ、さて此條ハ下
ふかの女やまゝゝゝゝゝゝゝやまゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ井の
ゝゝふゝゝゝゝゝゝゝ

とふ。かつらぎ山。ふかうて男ふかう。そぶらひとりゐる人の所
ぐるべきこゝろや。おりゐるぞ神ふる。神ふる。後のこゝろ。ゆしたる又ある
本ふ。神ふ浪度のと書ふ。ふ。下句。むげふかをつるぞ。むげてこし。後後
ハ。ことふかもかく書て。後しされど。ふ。ふ。神の後のかべ。たゝひ神
の後こゝふ。ふ。ハ。かくゝと。後の。ふきこゝ。下句の。ふゝ。神ひつ
べきものし。めをみゝ。後とる。かべし。女のゝ。ふゝ。ふゝ。ふ。ふ。
の文きこゝ。ふ。ふ本ふて。ゆしゝ。但しかの本。なく。新のうつを
ふ。成ふて。ゆ下ふ。女こゝつ。ふ。かゝて。ハいで。ゆ。ちゆて。彼本ゝ
きこゝ。ふ。ゆて。こゝぞよき。ゆ。ふ。ふ。ゆ。ゝ。此ゝの神二句の。ぞ。
いづゝ。ふ。ゝ。ふ。ゝ。ゝ。ぞ。ゝ。ぞ。ゝ。ぞ

さゝ本ふ神白いとしてハとゝ行るもゆもぞ。又さゝ本ふ此方の次う。
女返ふ付而。いづくまでおくりへうゝけうもをゝれし。ゐゐかも
ひてゝそゆもぞさゝ本ふ。おわ行ざわふと行るゐて。すゆ。今ゆ爲ゆゝふ
ふゐんやゝ爲ゆんやゝてゝ。ゝるゝ爲ゆんやのゝとゆわ。
死ゐんやゝてハからゝして。ふゐ出ゝ。いふゐゐそで。いそゝふゐばゐぎ
ゐ行ゝべゝゝゝゝ。ゝゝ人ゝ。ぶゐゐたゝゐきゐゐみゐふや。ゝとゝ
出ゝいゝぞゐゐゐ。ゐゝゝゝゝ。なゝをゝえ行ゝゐゐゝ中ゆわゐ
ゆゝバ。けゐあゐゐてゆゆ。ふゐゐゐふゝゝてゝゝふゝでハえ行ゝぞ
ゐゐゐ中ゆゐゝをゝバとゐ。ふゐゐゐそゝふゐゐふゝ。ゆゝゐゝを
ゝし。さゐゐ本ハゆゆ。ゝゐゐけゐゐゐゐけせんゝて。人をゝゐゐふ

ゐゝ。人をゝいふゝ行ゐゝゐ。さゐ本ふ。ゆゝ上ゐゐ。ゐゐゝ
人ゐゝゝゐゐゐゐの。ゆゆき本ゝ行ゐゝゐゝハ人をゝゐゐふゝゐゝ。
又男。ゆゐゐゐゐゐゐゐゐゝ。けゐ此條ゐゐゐゐゐゐゐゐ。さゐ本ゐ
ゐゐゐゐゐ。又男女ゆゝさのびありきしゐゐゐ。此ゐゝけゐぞゐゐゐ
ゐゐゐぞ。人ゝゝゐゐ男ひゐゐけゐゐゐゐゝ。ゐゝゝんゐてゝ
ゐゝゝんゐてゝゆゝゝぞゝさゐ本ふ。栄而ゝゐゐゝゝんゐゐぞ。田かゐんゝ
てハ男ゆゝゆふて。けゐ男ゆ田ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
かゐゐてゐゐゐゐゐゐゝゝけゐゐ。上の田ゐふ小ゐゐ。別條ゐゐゐ
ゐ。ゐゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
ゐふ男ゆゝゐゐてゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。又ゐゐゐゐゐゐ

上ることゝ。その男。或ハその人などあべきことし。こゝまやこのふかふく。
此ふかふかふかゝいふて。すまを。近ふかふいひうきうちとせんもまひどて
なるとゝ。ゆゝ。ゆゝ。近ふのこゝかくていそのこゝ。又下句もこゝまや
このゝいつふかうかをび。むゝよゝうかつきる女ゝこゝハ女ゝてハか
ゝをゝ。ゝゝ。ゝゝかふ。嫗女ゝいつるゝよゝしき。俗家の孔ゝとゝるゝかゝ係
よぎれもゝゝし。女ゝを。嫗ゝおの俗家ゝて。ゝゝゝし。又ゝたゝるゝこふ泊
もいゝ。ゝゝかふ。ゝゝ。ゝゝかゝゝよゝゝうゝるゝ。似べし。色ぬむゝ乃
ゝる老女し。ゝひえてゝもゝ。ゝかふ。ゝひえてゝゝゝるゝよゝし。その次
の泊ゝかの女ゝし。ゝゝきゝきゝハ男ゝゝゝて。嫗のゝゝゆ
ゝむゝゝひて。ゝゝし。いゝゝかゝきゝ。きゝふ泊いゝ。いゝ

なゝゝゝん。ゝゝどゝるべきゝや。ゝゝみきゝをゝゝゝて。いゝゝ泊
ゝの地の泊ゝゝて。いゝゝゝゝのゝゝかゝきゝゝゝべゝ。ゝ男いせの
ゝ。ゝゝかゝゝ女ゝゝ。ゝゝ女平ゝゝゝゝし。むゝゝゝゝかゝ
ゝゝ。ゝゝ女ゝに。ゝ男ゝゝゝる。むゝゝ男いせのゝゝて。ゝゝて
ゝゝ。こハ女ハいせのゝゝかゝる女ゝ。ゝゝかゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝかゝるゝゝかゝて。ゝゝかゝて。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伊勢かゝる女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝいゝのゝゝ。今ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝん。ゝいゝゝし。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のとうるべきまくし。　やよひのつごりもふ。その日もく。その日もいへ
ば何のもつづくまてはもるものし。　初茶のちもかふ。あるをわ。何
いつ。まこんかふかきぞよ。ものみぢとしてつくば。みてもよかんち。
板茶はもてふ。もてはもとかるべし。板茶のうちのもとつくるいふ
なり。板じ紀のもてふ。人の茶べきふもつくべ。みちはおりいき
ゆりきふとは。此和俗の仮者はみ。ゆくりもくゆ。者。ゆ
はあよそる義のるものくばかの義といふて。みちのふかの上ものくて
もいつ。　かるとは移んでろかもせで。上は移ふ事ませるゆ。いい
をざれだは何ゆうの移くゆ。こもふよりて思ふふ。板ををえ何
ろくを。板づるもくいふるもばは像ゆ。物といつるは。皆板づるのゆ

ふやりくん。上ものとふふ。くく。板のくをのくいへもばし。かるのく
移ぎさは茶をその院乃ゆく。こもゆはは何しまるなにくるのくるぎ
さの院乃くをよ板し。かのゆはは茶みよくてもりるみのゆま
のゆみくいふくなくてつくはふし。思へども身をくふ孫ばそ。
分ぬふくいふさし。此例古き分ふはをし。身はをるは。身を二つふ
もくるし。先くれ茶も雷ふえかつでくふあるはいふさくて
そをもとは。日が本をしくいつるし。　今までふをくくてやくふるも
くいふ紙上りんぞくるもしや思ひ身をくいつるにうは移ゆ
うもしやもぞ。此くぞは。茶宇はよくまくえくる。　茶男ゆりを
つといくは有りもし。その男をくはまるは本ふ。茶男女をくくゆ。

でハしゆしつぞ。　さてやがて後つひふ世不相見ぬてらぶくし。
まゝ本にもさてつひふくまさてそこハ俗者の語をもバふたゝ
いつもいつぐし。始もバさて後つひふよくてやたうんそこそを
べるも。ひくつをたてこいつふうわ。おもぬかのふやたうんといふまでハ。
のろひごと成(サダ)ぬ。しもう俗し。むくつけきてハむくつけきてよわく
いふとしかくて今てをハそもといふ一句ハさうでうちう男ハのろひ
ていつる言ぬる成(サダ)ぬる俗の中へ引出ていつるし。　よに酒ありとき
まてゝ。ぬ下ふ詞ぬる。しまてハ下ふその日ハくいつるも。まを本ふし。
うろうふうの為ぬる詞とおぎぬ。よにまを有ときてうへふたつを
ぬる人〻のまんうてきくを在中矣ぬ。ぬどやをりを。たつぐぬ

そうかゝぬるぬ下ふ男ぬどたつをみかし。　ぬくうりふかたる成。まを本
ふ。ぬくをまをぬる女ををうをよぬし。　ぬ下ふものをゝ又ふへ下ふ
しをはをゝ。ぬ又のふへ下ふがをうをを中ぬ。まを本ふハ。ぬ二をハ上をハ
別(ドクノ)條をて。ぬしをゝ下ふををうををうをふ。　今ハ
ちをてふぎぬくをゝ。ぬをををぬてがくいつをて中ぬ。まを本ふ
をなま為の今ハをゝををを。よぬし。ぬをどをぬ上ふ中ぬをりを為
をつをハををし。かの為ををををふどをを又を上を中ぬをりをを為い
まハををををゝ。ぬて。ぬの不ふハ行ををいをでもをりをん。　大鷹
のををぬひを。まを本ふ。大方(オホカタノ)をゝ行ををハ。ぬがををし。西宮記ふも。

鷹飼　王卿。大鷹飼者。著(ス)地摺。猟衣(ヲ)。綺。袴。玉帯。鵜飼(コヅカヒハ)者

うゝとなるゝふゝかゝるをや。　芳みゝぐ住吉うゝ。仏條
をべゝ泊ゝび。他條の例うゝ心ぞ。永えて心の云も。しゆが云ゝと
うゝにまへゞゝ大神の現形も俄に。他條の例よりゝひゝいゝで。芳
男みゝどの住吉ふゝ者ゝ。ゆゝひゝゝ。ゆゝ他ゝ。ゆゝゝまりてよゝる。
永えてもゝゝとゝゝゝわゝれぞ。大神ゝゝ。なゞゝゝ自べゝと。
むつまゝとゝゝの云ハ行すぞや。二の白波。ゝゝゝゝぞやゝゝゝれバ。大
ゝゝ芳ゝやゝゝハ行をゞ。ゆゝゝゝ。　むゝ男人ゝゝゝ。
ゝゝ本に。ハつゝゝをゞの下ゝ女ゝゝゝ。　むゝ女のゝゝゝ男ゝゝ。
女のゝのゝ。ゝゞてゝ。をべゝのてふ詞ハ仏法をて。おくべき和と。必おく
ゞゝゝゝゝ

しゐびゐなどハそゞむべきふもつゝぞ。ぞおゝく化さゝ
ゝるゝ。ゝゝのゐやをこそ。そゝゐそで。ゑ海ゐびのしゐちをふも文
かゝ。ほんふゐもゝべきゝぞかゝ。ゑハまれゐハ。えもいゝで。ゐゐき
ゐまぞきわ。ゝゝんしてえべし。住稱ぞとハ。ゐゐゝたゐ中ふい
ふべきハ。繁沖が臆断。師のゐゝぞゐゐ。ゐぞひふゐんゐき
ゐしきゝゝふゝを有をゐ。文ゝとふいふぞやおぞゐゐゐしもを
ゝれゝゝび。かのゝとゝゝ思ひえゝゐゐしぞゝきて。えやくゐわ。
ゐぶさふゐゝさゐふし〳〵思ひゐゝゐ波。ゑゐを結やゐよぞん。
いせをゐあるのいゝゐかゝて。えゝとをゝさゐぞ。ゐちをゝさゐ。
せゑてゝぞことかゝとゝえゐの。ゑゝ。いゝゝゐ上の件ふハ和しつ

ゐぞかし。

○紫式部紀貫之いまはの云ひ葉

古今集ふやまひしてゝゐゐ形のふゐる時よりあるゐなるゝゝ之ゐ時
紀貫之ひふゆゝさゝハゐゐて笑しかぞきのふきふもいゝえ
ぞわし。繁沖いゝゝこゝも人のゝゝゝのんでゝをゝんゐゐも
よゝゝゝ。後ゝゝ人を死をんゝきゐふいゝわゐて。おゝぞ
しゝゝ。ゝゝよみゐるハさをさゐゐゝ形ぞよゝゐるゝものゝし
ゐゝぞしていゝふゝ。ゝぞなる時ゝを。狂云綺語をもまぞ
ゑいゝはゝゐゐんゐきふぞふんのゝゝふかゝゝゐ。ゝ紀貫ハ。
一生ゝきゝ。此云ふゐゐゐ。後の人を。一生の傳をゐゐて

死やるしといつるハ、ゑしのことばゆゑなるべし。やまとことばにしひるる人をハ、法師なるべしかくてゝをれがらんなる所神をあがめ書あまたまをふかうハいたんや。禁中法師ハ、よの人ふまこゝろ、神をへ神を者ゑ学者ハいつゝりをぞをゝぬる。

みちのくにぶり

陸奥をゝ、ゑふもよもぎ〳〵。美知乃久ハ、和名抄ニハ美知乃於久〳〵ゆゑて道〳〵奥〳〵いふ時ハ、美知乃久乃久乃久ハ中昔の和語書ぶゝ、みちのくのくにいつゝハ、みちのくのくふゝといひて、乃久といふこの言ゆゑて、ゆゑ〳〵きゝふ乃久をゝぶきて、いひ〳〵なるべし。ゑふを

又後ゝハ、むかしのくにいつゝみちのくにを訛ゝるゆゑ、陸の字、ゑの云字ゝ通ゆ。ゆゑ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

今も和泉の井とて、いまゝ[illegible]ぞ[illegible]清水[illegible]ぞ[illegible]そこの泉、
井上神社、和泉神社なぐもとて、式内の名並河氏が
かゝる、和泉志をこんとバ、代和泉井を挙て、其水清且甘と記
きゝ[illegible]思へど、此清水上つ代よりいまゝ清くて、甘かりしを
り、ふぎいづと号て、和泉と書しは、[illegible]人なぐ[illegible]
ど泉とのゝいひあつるが、[illegible]ぞ[illegible]人な
ぐも、泉とのゝいひあつるしまかて、[illegible]の名も國の名ともな
る[illegible]ぞ[illegible]二字ふくるゝ[illegible]文字ふそりかゝ
ぞ、本はなのごとく、和泉とハ出るべし、やまゝ出し、語ハ[illegible]
ふと[illegible]ぐやまゝのゝいふを、ぐ[illegible]大字[illegible]大和と

かゝ[illegible]ぐ[illegible]ぐひし、それを和泉の和の字ハ、[illegible]ふぎ泉と[illegible]
[illegible]ぞ[illegible]

鳥羽殿八月十五夜月見[illegible]

中右記云、寛治八年八月十五日、天晴、午時許、候大
納言殿、御車後、参入鳥羽殿、先於宰相直廬休息、具
申大納言殿、申時許、参入大殿、御直廬則引、公卿令
参、先御鳥羽殿南、御所寝殿東面、女院同御也、女房
南東面打出、公卿座西廂、居饗饌、人〻雖被著、無盃
酒、儀已依□日暮也、寄御船於東渡殿、上皇令乗給、
大殿左大臣関白殿、藤大納言中宮、大夫師忠左大将

忠皇大后宮、權大夫公新宰相、中將宗通此、外宗忠并
左中將有賢依召候御船有別仰帥大納言經信備中、
守政長朝臣可候御船者以御隨身被相尋問已及數
刻兩人追被參加後出御船御船指四人判官代勘
解由次官顕隆散位忠清藏人高階為賢源家時皆布
衣上達部船新大納言家忠右衛門督公実藤中納言基忠
新中納言通俊江中納言匡房左宰相中將仲実右兵衛督
雅俊中宮權大夫能実以武者所四人為船指布衣殿上人、
船頭中將國信朝臣等四十人許皆布衣此外御隨
身副小船前行先於御船有御遊藤大納言伯子帥大

納言琵琶左大將篳篥宗忠笙有賢和琴皇大
后宮權大夫并政長朝臣付歌先双調紀伊州席田
鳥破急平調大平樂破伊勢海廻忽五常樂急帥大
納言朗詠盤涉調秋風樂三帖青海破蘇合急各及
數反于時雲收天清月明池上絲竹之調興入幽玄
此間棹小船但馬守隆時朝臣甲斐守行實朝臣供
御膳牙盤三前有打敷有物諸卿傳進供之次第在座進上
也中宮大夫被候陪膳公卿衛重便居船之緣御盃
則給大殿大殿指左大臣左大臣指關白次第巡流
及二獻公卿船朗詠數度夜及三更從御船令上給

了。於女院御方東面。被講和哥。題云。翫池上月。序題。帥。
予勤仕講師。尤大臣為讀師。講大納言哥了後。頃而
頗遲々。是尤大臣與関白殿哥次第之支也。依大殿
命。先講関白殿哥。次尤大臣。次大殿。此間女房従簾
中。被出三首哥書薄様三重。被置扇上。扇銀骨。畫図殊例。同
講之。皆以秀哥也。人々感歎。爰従簾中。給御製於関
白。関白傳献大殿。便宜也。大殿令氣色。講師起座擬
臣下哥。召新中納言通俊卿。被講御製。誠以優妙也。
不堪差歎。滿座諷詠。及曉更。各分散。予今日殿上人
布衣中。着直衣。是為辨官人一人。臣被着直衣冠時。

可無便之故也。加之勤講師役間。数刻候御前。尤為
善耳。愚意之案。已叶礼法。両殿下烏帽子直衣。尤大臣公
卿冠直衣。但此中藤中納言基尤宰相中将伊実右兵衛
督雅俊新宰相中将宗通布衣也。皇大后宮権大夫公定衣
冠。上皇御烏帽子直衣。[illegible]。[illegible]。[illegible]。
八条極芳冥白師実公尤大臣八条。後房公冥白。京極殿の御
後二條師通公。此時内大臣ふて。冥白わがし。尤大臣の次ふ立給へ
[illegible]。中[illegible]。尤大臣宗忠公の日記ふて。寛治元年
四月[illegible]。保延元年十二月までの事沙記[illegible]。合せて七十

巻にて、絵もどもの、とかぐ、えしかわしく本ハ闕（カケ）ゝ所〳〵にありしを、
そのゝち全きハいまじぐええぬ、完法乃こゝにも、宗右ゑのいまぐ考く
て、殿上人ゝ、おもせ〳〵かぐけすし。

立田山小ぐゝれ畧

いゝ人ゝ知ゝり雑波へもいづく〳〵も下伏ふ城（ヒエ）し。立田山ハ今ハ
ゝ〳〵がり峠し。〳〵いふ流乃にゝるハ、その名万葉九の巻ふ小鞍嶺（ヨグラノミネ）ゆ
にゝふ西ひ、又りけそ、今の平ふむひ〳〵こゝるゝ所とバし、そのうへ
そ乃にゝりふ小倉ち村〳〵ゝあるゝ所とバ、ゝとにゝん。こハ必にゝ
ゝ所ぐゝ。立田神社〳〵ほぐゝけい〳〵をきハんけぬ〳〵ふあぐえ〳〵ふにゝる
人乃、立田山をぐゝけらゝハ、ゝ〳〵がり城（ゴエ）ゝハにゝ〳〵び、今の立野城

なゝわ〳〵いひ、又此ぐゝ城、師のいせ物ぐゝけ古ゝの志るふ附（ケ）ゝる。
上田、秋成〳〵いふ人乃考へふも、紙ひて、そのゝ〳〵ゝ伏ゝ〳〵ゝ
きゝ人〳〵ゝハ、ゝ〳〵ふゝ〳〵ゝ思ゝ〳〵ゝ伏し立田川〳〵いゝを、
そこ所ゝ川〳〵いゝ所ゝハ、ゝぬが〳〵ゝ、こハ立田山のにゝゝの川〳〵ゝ
ゝも物〳〵思ふべきこゝふて、ゝ志ゝ〳〵ゝみる紙ゝ〳〵ゝ考へ本つゝ。
立田川〳〵いふ名ハ、万葉ゝ〳〵ゝふゝ。ゝ所ゝ伏ふも、ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵〳〵て、今ゝ京ふゝ京ふゝ所ゝての後乃、ゝふ、ゝ〳〵ゝ〳〵ゝハ、立田山〳〵
ハ異（コト）ゝ〳〵ふゝ志て、大和ゝ国ゝハにゝ〳〵び、此にのゝハそでふ一の巻ふ、
ゝ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ぐ〳〵。